

# プロジェクトを通じたグローバル人材育成の試み

竹内 典彦    サイモン ソーラ    三浦    洋  
川上 正博    安田 光孝  
北海道情報大学

Global Competency Education through Projects

Norihiko TAKEUCHI, Simon THOLLAR, Hiroshi MIURA  
Masahiro KAWAKAMI and Mitsutaka YASUDA  
Hokkaido Information University

平成28年 3 月

北海道情報大学紀要 第27巻 第 2 号別刷

## 〈報 告〉

## 〈学内共同研究報告〉

## プロジェクトを通じたグローバル人材育成の試み

竹内 典彦\* サイモン ソーラ† 三浦 洋‡

川上 正博§ 安田 光孝¶

## Global Competency Education through Projects

Norihiko TAKEUCHI\* Simon THOLLAR† Hiroshi MIURA‡

Masahiro KAWAKAMI§ Mitsutaka YASUDA¶

## 要旨

本稿は、2014年度学内共同研究として実施した「プロジェクトを通じたグローバル人材育成の試み」の成果について報告するものである。本学で実施されている様々なプログラムやプロジェクトをグローバル人材育成の観点から検証し、効果や課題と対策を探ってみた。研究は、主に参加した学生や、指導した教員のインタビューによって実施した。その結果、それぞれのプログラムやプロジェクトには、一定のグローバル人材育成の要素が盛り込まれていることがわかった。それでもそれぞれの活動における課題は残されている。今後はそれらの課題を克服していくことが望まれる。

## キーワード

グローバル人材育成教育、プロジェクト、コミュニケーション能力、主体性、責任感

---

\* 北海道情報大学経営情報学部先端経営学科教授, Professor, Department(Dept.) of Business and Information Systems, HIU

† 北海道情報大学経営情報学部システム情報学科教授, Professor, Dept. of Systems and Informatics, HIU

‡ 北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科教授, Professor, Dept. of Information Media(IM.), HIU

§ 北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科教授, Professor, Dept. of IM., HIU

¶ 北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科准教授, Associate Professor, Dept. of IM., HIU

## 1. はじめに（グローバル人材の定義）

グローバル人材の定義については、様々なものがあるが、文部科学省の2011年6月に出された「グローバル育成推進会議中間まとめ」には、グローバル人材の定義として、次の三つの要素があげられている。

要素Ⅰ： 語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ： 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ： 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

様々な要素をバランスよく取り入れたよいまとめとして、本研究ではこの定義に基づき、論を進めていきたい。翻って、本学で実施されている様々なグローバル人材育成のプログラムやプロジェクトとして、「海外事情」、「英語フォーラム」、「TEDxHIU」、「UNIPA」のネパールプロジェクト、「札幌インターナショナルナイト」、「英語プレゼンテーションコンテスト」、「留学生による日本語弁論大会」、等がある。本研究では、グローバル人材の観点から、本学の様々なプロジェクトを検証し、それぞれの効果や課題と対策を探ってみた。

## 2. プロジェクト（プログラム）と学生の変容

本研究では、上にあげたプログラムやプロジェクト参加者にインタビューを実施した。また指導に当たっている教員から話を聞いた。

### 2-1 海外事情

最初に「海外事情」についてだが、本学の海外事情には「米国編」と「中国編」があり、「米国編」については少ない年で10人程度から多い年では20人を超える年もあり、実際2014年は22人とこれまでで最多となった。ちなみにプログラム担当者は2014年度からソーラ教授に変更となっている。

一人の参加学生は、「海外事情」に参加後たいへん意識が変わった。彼は「グローバル人材」とは「知識が豊富で異文化に対して偏見がない人」というイメージだった。海外事情に参加して多くの現地の人と接するうちに、「グローバル人材」とは「積極的にコミュニケーションをとる人」であり、「主体的に物事を学ぼうとする行動力にあふれた人」という印象が変わった。

日本に来る外国人についても、「自分の意志を実現する（この場合は訪日すること）行動力がすごい」と思うようになった。また参加前は「英語が話せないとだめ」と思っていたが、参加後は「とにかく伝えること、つまりコミュニケーションそのものが大切」と考えるようになった。たとえば「ボディランゲージ」や「筆談」をしてでも、確実に自分の意志を相手に伝えることである。

帰国後は困っている外国人がいれば自分から話しかけて援助できることがないか聞いているそうだ。英語の面でも、参加前は「多少話せる」というレベルだったが、参加後は「相手の話を理解できて応答できるようになり、自信がついた」ということだ。

また「日常会話はそれほど難しい単語を使わない」ことに驚いたという。ホストファミリーとアメリカンフットボールの試合を観戦してルールについて質問したり、他にも自主的に外出して行動的になった。また現地のアジア系の人がいへん協調的であることに感銘を受け、自分もプロジェクト等で仲間の手助けをする等、以前より協調的になったということだ。

先にあげた「グローバル人材」の要素Ⅲにある「日本人としてのアイデンティティー」だが、これを誤解して「遠慮すること」や「必要な時以外は発言しない」等の「シャイな」日本人らしさは、国際的な場面では改めるべきであると、彼の話聞きながら感じた。

### 2-2 「海外事情」の指導教員の話

次に、「海外事情」を担当されているソーラ教授の話を紹介したい。

北海道情報大学は、『産学協同の精神の下、豊かな国際性、創造力ある人間性を涵養し、実学に裏付けられた実践的な専門教育を通して、我が国の国際情報通信社会の進展に貢献する高度情報通信技術者を育成する』ことを使命としている。本学の「海外事情」は、この本学の建学の理念を具現化した、たいへん重要なプログラムである。

「海外事情」は本学の英語教員が中心となって、15年以上実施されてきたプログラムである。これまでの研修先は、カリフォルニア州サンタクルーズやワシントン州シアトル近郊である。また2015年度からはオレゴン州ポートランドが研修地となった。この研修に参加した学生は、通信教育の学生も合わせると、これまで200名近くである。

参加した学生たちの多くにとって、この研修はまさに「人生を変える旅」となり、二年連続で参加した学生もいたし、自分一人でその地を再訪する学生もいる。

課題の一つとして、学生は研修の報告書を提出するのだが、まさに彼ら自身の言葉の中に、「海外事情」の重要性が語られている。典型的な文章の例をいくつかあげてみる。

学生 A「今回の研修での最大の成果は、アメリカに対して自分が抱いていた先入観を打破できたことだ。実際にアメリカの人々の暮らしぶりを目にして、日本の文化と比較することができた。いろいろと困難なこともあったけど、それも良い思い出である。悪い出来事も、時には自分のためになることを学んだ。」

学生 B「私は『ゼルダの伝説』というゲームが大好きだ。このゲームは、アメリカでは日本以上に人気があることがわかった。ポートランドでは関連のグッズがたくさん売られて

いて、私もそれらを買った。いろいろな人と『ゼルダの伝説』について話すことができ、英語の勉強にもなったし友達もたくさんできた。貴重な経験もたくさんできたし、本当にすばらしい三週間だった。」

学生 C「英語は全然苦手だけど、英語を話せるようになりたいと思っていたので、ポートランドの研修に参加した。行く前は、自分の英語は通じないだろうと思ってとても不安だった。でも実際行ってみたらその心配は吹き飛んだ。みんなとても親切だった。だいたいのは通じたので、話していてとても楽しかった。」

学生 D「ポートランドと札幌の違いにいくつか気づいた。その一つは、ポートランドでは、知らない人同士でもよく話をするということだ。自分が外国人だったせいもあるかもしれないが、知らない人によく話しかけられた。他の人はどう思うかはわからないが、少なくとも私は、知らない人とも話ができることを楽しく感じた。こうして他の文化と接することができたのは素晴らしい経験だった。」

学生 E「研修の最初の一週間はできるだけ礼儀正しくしようと思った。そうしたらホストファミリーに『あなたは謝りすぎですよ』と言われた。それからはなるべく冗談を言うようにしたら、ホストファミリーと、とても仲良くなれた。いっしょにたくさん笑って楽しかった。現地で経験したことは、自分のためになることばかりだった。」

このように「海外事情」は参加した学生たちにとって、たいへん価値のある経験となっている。「自信」と「自己肯定感」を身につけただけでなく、「国際性」を高めて、将来の仕事にも生かせるようになる。まさに本学の理念に沿った学生を育成しているプログラムと言える。

### 2-3 英語フォーラム

次にJ（自主）ゼミの一つとして、2014年度初の試みとして開催された「英語フォーラム」の参加学生にインタビューした。「英語フォーラム」では、三浦教授による「I'm Proud of Soseki」というタイトルによる英語講演が行われた。

参加した学生の一人は、米国留学経験があり、非常に英語ができる学生だ。講演の後に英語で質問していた。参加した理由は三浦教授の研究に興味があったということだった。やはり、「英語フォーラム」という英語で行われる講義の形式は、英語力のある学生を引きつけることが立証されたと感じた。

別な学生は「コミュニケーションが苦手なので、竹内教授に誘われたので参加した」という。「日本文学と英語の関わりが面白かった。次回も同種のものがあればしたい」という。英語が苦手な学生でも、テーマにさえ興味を持てれば、参加してもらえると感じた。

実際この催しは参加者にたいへん好評であった。学生の他に教職員も何人か参加されていた。その教職員も三浦教授の話すテーマに興味を持ったという。また英語の重要性を日頃から意識していることも参加の理由だった。つまり教職員にとっても、グローバル人材の要素である「英語力」への関心は強いものがある。

### 2-4 UNIPAの活動

次にとりあげるのは、学生団体UNIPA（ユニパ）である。UNIPAは、「現代美術研究会」（顧問は安田准教授）のサークルの学生が中心になって、ネパールに行き、現地の子どもたちに「アート」を教えるプロジェクトである。2014年3月に三つの教育施設を訪れて、アート教育を実施した。その内容を「アートによるネパールの子どもたちへの教育支援-

学生団体UNIPAの活動報告から」として、グローバル人材育成教育学会第1回北海道支部大会と、同学会の第2回全国大会（秋田の国際教養大学で開催された）で学生が発表した。

ネパールや全国大会への引率を含めて、安田准教授が指導に尽力されている。彼らの取り組みは2014年度も継続されて、2015年3月に二度目の現地での教育支援が実施され、大きな成果を上げた。これらのプロジェクトに参加した学生は、「グローバル人材」としての要素をたくさん獲得した。

現地では「英語」を使用したがるが、子どもたちは英語が不慣れなので、現地の先生が英語をネパール語に通訳したり、英語の得意な安田准教授に、自分たちの日本語を通訳してもらったりしたという。英語だけでなく現地語を積極的に使用することの重要性を感じたと話している。

また英語学習へのモチベーションも高まり、TOEICを受験する学生もいた。行動もたいへん積極的になり、TEDxHIU2014のスピーカーになる者もいたし、そのオーガナイザーを務めた者もいた。

### 2-5 TED x HIU

次に取り上げるのは「TEDxHIU」である。「TED」や「TEDx」は米国発のプレゼンテーションのイベントであり、本学では2013年、2014年と二年連続で「TEDxHIU」が実施された。テーマは「Building Global Vision」と「After Internet」であった

聴衆はほとんど全員が日本人だったが、グローバルイベントの趣旨を生かすために、2013年も2014年も1名の教員と1名の学生が英語で発表した。これらのイベントを通じて英語や留学に対する興味を持つ学生もいた。

このイベントに関りを持った学生の中には、J（自主）ゼミの英語講座に自主的に参加する者もいた。またTEDxHIU2013のスピーカ

一を務めた後、UNIPA の活動に参加する者もいた。

TEDxHIU の顧問は竹内教授と安田准教授と島田准教授であり、留学生支援事務室の小黒職員や国際交流委員会の委員である穴田教授にも指導に加わっていただいている。

## 2-6 札幌インターナショナルナイト

次に「札幌インターナショナルナイト」であるが、この学外イベントは川上教授が窓口になり、本学の学生や留学生が多く参画している。2013年の「インターナショナルナイト」ではTEDxHIU2013スピーカーの学生が英語による司会を務めた。

またこのイベントに参加した学生がUNIPAの活動に参加したり、タイの大学への研修プログラムに参加する等、学生を「グローバル人材」に変身させるきっかけにもなる、たいへん貴重なイベントである。

## 2-7 英語プレゼンテーションコンテストの指導教員の話

そして「英語プレゼンテーションコンテスト」だが、これまで8回開催されて、授業でのプロジェクト課題として多数の学生が参加している。このコンテストを経験して、英語に興味を持ち、海外事情に参加する学生も少なくない。このコンテストを担当しているソーラ教授から話を聞いた。

このコンテストが最初スタートした時は、「ドラマ部門」と「スライドプレゼンテーション部門」の二つの部門だった。

「ドラマ部門」は日本の昔話をもとに、学生たちが話を作り、役を分担して映像にとり、編集をして動画を制作するというものである。こうしてたくさんの英語による日本の昔話の動画が制作されてきた。この部門は大変人気があり、毎年100人以上の参加者がいた。

学生の同意を得て、優秀な動画はインターネットに掲載して、日本だけでなく世界中の人たちから感想をもらっている。こうして学生たちは、日本文化の発信と同時に世界の人たちとコミュニケーション活動をしていることになる。たいへん意義のある部門であったが、財政的な問題もあり、この部門は廃止され学生も残念に思っている。

「スライドプレゼンテーション部門」は、まさに建学の理念に沿った、ITとコミュニケーションと英語力の向上を目的とした部門である。これまで600人以上が参加してきた部門であり、学生たちは5組に与えられる賞状と賞金を目指し、意欲的に取り組んでいる。

この部門は、画像や英語音声を含むスライド作成というITスキルの向上と、英語スキルの向上と、チームの仲間たちと協力し合い、また他のチームと競い合い、成績にも関係するのでたいへん熱心に取り組まれている。

教職員も表彰式でこれらの作品を見ることを楽しみにしてくれている。ドラマ部門と同様に、将来的には優秀作品をネット上に掲載しようと計画している。

こうしたコンテスト等の活動を通じて、学生たちには、英語が単なる「卒業のために必要な科目」ではなく、英語はまさに「国際語」であることを認識してもらいたいと我々英語教員は考えている。建学の理念を実現するためにも、学生たちには英語を習得して、国際的にも有為な人材となっていただきたい。

## 2-8 留学生による日本語弁論大会

最後に「留学生による日本語弁論大会」はこれまで5回開催されてきたが、2014年、2015年と2年連続で最優秀賞を獲得した留学生は、本学の体育系の部活動に積極的に参加している。日本人学生との交流が多く、日本語の習得に役立っている。

## 3. 考察と結論

こうしたプロジェクトは、グローバル人材の要素と見事なくらい一致している。すなわち「要素Ⅰ」の「語学力・コミュニケーション能力」が必要であり、「要素Ⅱ」の「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」がなければプロジェクトを成功させることはできず、「要素Ⅲ」の「異文化に対する理解と日本人（留学生の場合は中国人）としてのアイデンティティー」を実感することになるからである。

また各事例を見ていくと、一つの「経験」が、別のグローバルなプロジェクトやプログラムへの参加を「誘発」することが実に多いことに気づかされる。つまり同じ学生が、一つのプロジェクトで自信をつけて別なグローバルなプロジェクトに加わっている。

そしてこれらの事例から共通して見えることは、学生の「自信」である。学生が「経験」を通して様々なことを学び取るとともに、何より自分自身に対する「肯定感」、すなわち「自己効力感」を成長させることができるのである。

「自信」や「自己効力感」は「グローバル人材」特有の要素ではないが、本学の教育の柱である「全人教育」の根幹となるものと考えられる。したがってこの観点からも、グローバルなプロジェクトやプログラムは重要な役割を担っている。すなわちグローバルな取り組みに参加することで「自信」や「自己肯定感」を得られるのである。

また、これら全てのプロジェクトやプログラムには本学の教職員が様々な形で関わっている。もちろん本共同研究の教員（全員が異文化や留学の経験者）が大きな役割を担っているが、他の数多くの教職員も程度の多少はあるが、たいへん貴重な役割を担っている。活動を継続して積み重ねていくことで、学生の成長を促していることに、教職員も大いに「自信」と「誇り」をもってよいのではない

か。

こうして「グローバル」を含む日頃の教育活動にまい進することで、本学は益々、「グローバル人材」や「前途有為な人材」を多数輩出しつつ、今後も発展していくであろうと確信している。

#### 4. 今後の課題

「海外事情（米国編）」に参加した学生の声だが、「もっと多くの学生が参加すべきだと思う。海外に行って得られるものはとても大きい。日本にはない文化に触れられる。何より雰囲気が違うので、自分も話そうという雰囲気になる。」と語っていたのがたいへん印象的だった。彼はまた「もっと話をする場面があってもよかった。」とも語っていた。我々教職員は、現在のプログラムに自信を持つとともに、学生の声にも耳を傾け、プログラムをさらによいものにしていく不断の努力が必要であることを改めて感じた。

また、様々なプログラムの学生への情報提供をさらに推し進めることも課題である。留学を促す「トビタテ！留学 JAPAN」プログラムも始まった。教職員もより綿密に情報を共有し、留学を志す学生たちにそうした情報を提供して、「成長する機会」を逃がさない努力が重要である。

さらに、本学がこうして様々なプロジェクトに挑戦していることは、パンフレット等を通して学内外でも一定程度知られているが、教職員や学生自身がさらにPRすることで（UNIPAの活動はテレビに取り上げられた）、今以上に本学の名声を広められるのではないだろうか。

#### 参考文献

- [1] 文部科学省 HP(2011)「グローバル育成推進会議中間まとめ」。
- [2] 三木谷浩史(2012)「たかが英語」講談社。

**謝辞**

本報告は2014年度学内共同研究をまとめたものである。研究にご協力をいただいた関係教職員と学生諸君にこの場をお借りして深謝したい。